

「ネギをうえた人」

北川 知子（大阪教育大学）

「ネギをうえた人」という朝鮮民話を、最近よく考えます。

『ネギをうえた人 朝鮮民話選』（金素雲編）という岩波少年文庫の1冊が刊行されたのは1953年。現在の版は装丁がリニューアルされた岩波少年文庫の2001年初版のもので、本には、30篇ほどの短いお話がまとめられています。表題作の「ネギをうえた人」はこんな物語です。

—— 昔、お互いが牛に見えて、人間同士が食べ合ってしまう国がありました。ある人はそんな国が嫌になって、「人が人に見えるまともな国」を探す旅に出ました。そして「まともな国」を見つけます。そこでも以前は人が牛に見えたが、ネギを食べるようになってから、人が人に見えるようになったと知りました。そこで彼はネギの種を、自分の故郷に持ち帰ります。「ネギが芽生えてみんなで食べれば、無残な殺し合いはなくなるのだ」と、祈るようにネギをうえた彼の姿を、昔からの知り合いが見つめます。その人には彼が牛に見えたので、彼は食べられてしまいます。が、彼がうえたネギは青々と育ちました。「おいしそうな草だな」とネギを食べた人びとは、人が人に見えるようになりまし。彼のおかげで、人は人に、牛は牛に見える国に変わったのです ——

この民話の、「人が人に見えず殺して食べてしまう」ことや、そうさせない「ネギ」の力、「ネギを食べる」行為に託されている寓意について、考えさせられているのです。

これまでの歴史から、大量虐殺は突然始まるわけではなく、その前段階として殺す側が殺す相手を「同じ人間だと思わなくなる」段階が必要だとわかっています。自分より劣っている、自分にとって脅威で厄介だ…ある属性グループの人びとをそんなふうに異物視、敵視し、「自分と同じ人間ではない」とみなしたとき、人は殺すことに躊躇がなくなり、殺す側になってしまうのだと。「人が牛に見えてしまう」のは、まさにそういう状態の寓意ではないか、と思えます。

それでは、「ネギ」は何を表すのでしょうか。

私は、「ネギ」は「知識」の寓意ではないかと思っています。そして「ネギを食べる」ことは学ぶこと、ともに食を分かち合い対話し、人間的な共感の力を育む営みを指すのではないのでしょうか。「ネギをうえた人」はそんな大切な世界をつくる最初の種まきをしたのです。

私たち一人ひとりが「ネギをうえた人」をめざす、そんな新年度スタートにしたいですね。